法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

［最優秀賞受賞研究／インスタレーション部門］　追方夏生　回顧展

嶋﨑，由依

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化 / 異文化
(巻 / Volume)
16
(開始ページ / Start Page)
147
(終了ページ / End Page)
154
(発行年 / Year)
2015-04

Hosei University Repository

追方夏生　回顧展

国際文化学部　稲垣ゼミ
嶋﨑由依・金秋りさ・橋田悟・池田佳穂・北圃莉奈子・石川理恵・
窪田寛大・井口志乃・松橋さやか・最上拓朗・石井陽子・山田茉奈・
齋藤瑞季・船越由羽子・山本詩帆

我々稲垣ゼミは学会で「追方夏生 回顧展」というインスタレーションを行った。今回はどのような経緯でこのインスタレーションを作り上げていったのかについてまとめたいと思う。

まず学会に参加するにあたって、インスタレーション部門にエントリーすることはすぐに決まったが、具体的な内容の話し合いになると様々な意見が出され、簡単にはまとまらなかった。インスタレーションで何をどのような形で伝えたいのかを考えると同時に、何よりもゼミ生全員が熱意を持って楽しみながら取り組めるものにしたいということを踏まえ、架空のアーティストのインスタレーションを行うことに決まった。

最終的に追方夏生というアーティストの回顧展という形でインスタレーションを行ったのだが、追方はもちろん架空の人物である。ふと頭に浮かんだ追方夏生という名前は稲垣立男（いながきたつお）の文字を入れ替えて作った名前である。そんな思いつきで生まれた追方という人物について皆で意見を出し、追方の歩んだ人生を考えていくうちに本当に追方が存在していたかのようにゼミ生の間で追方夏生の人物像が共有されていった。そして追方夏生という人物を通して、来てくださった人々に情報を鵜呑みにせず自分で信憑性を確かめる必要が

Hosei University Repository

あること、ものの本当の価値とは何なのか、価値を見極める目が必要であることを伝えたいと考えた。

追方夏生という架空のアーティストを作り上げるにあたって重要視していたことはいかに人々を信じさせるかという点である。追方という人物を作り込まなければ、人々はこの回顧展自体を疑って観ることになる。疑いが生まれると我々が追方を通して伝えないことが全く意味を持たなくなる。そこで出身地、幼少期、中高生時代、アーティストになるまでの過程でどんな体験をしてきた人なのかなど詳しく考え、作り込んでいった。アーティストになるような人はどんな人生を歩んできた人なのだろうかと考えていたが、今の私たちの年くらいまでは私たちと変わりない人生を歩んできて、アートに関連する要素を所々に散りばめておき、一度は大学に入学したが作品を作りたいという強い意志で美術大学に入学し直したという経歴を作り上げた。

またどうして稲垣ゼミで追方をとりあげることにしたのかという経歴が自然でなくてはならず、その理由付けにも苦労した。当初は稲垣ゼミの活動を通して出会ったという流れを考えていたが、アーティストでもある稲垣教授との関係を考えたほうがより自然になると思い、稲垣教授にいつ頃にどんな活動をしていたのか伺った。追方の活動の中に被災した子供のためのワークショップがあるが、これも稲垣教授の経験や活動を少し参考にさせていただいた。また追方はすでに亡くなっていうという設定にしたので、亡くなったアーティストの作品を懇意のアーティストが譲り受け保管している場合もあると聞いたことを元に今回の回顧展では追方の作品をそのまま展示し、その作品の入手ルートまで決めた。

またメディアや情報、芸術の関係のあり方や、情報を鵜呑みにしないということを伝えるため、ただ単に「架空のアーティストの回顧展」

Hosei University Repository

を開くだけでなく追方の作品や考え方でも我々が掲げたテーマを示すことができるように考えた。例えばアメリカの同時多発テロの時に追方は日本のメディアがアメリカ寄りの報道しかしないことに疑問を持ち、それに関連した作品を作ったという設定にした。

続いて追方の作品について、それぞれの作品を作るに至った理由を各作品ごとに紹介する。

「nick wilder」

nick wilder という彫刻を作る際、1991 年の作品という設定のために当時の時代背景、またその時活発だった芸術運動を調べ、どのような作品にするか構想を練った。その結果、90 年代の日本の芸術活動のひとつであるアプロプリエーションアートを使った作品を作ることになり、「nick wilder」が作られた。

アプロプリエーションアートとは元々存在する著名な作品を自分の作品に引用する手法である。稲垣教授からこの手法が当時盛んであったと教えていただき、展覧会にもそのような作品を置いたら面白いのではないかということで採用した。今回の作品ではデヴィッド・ホックニーの「Portrait of Nick Wilder」の中の人物を引用した。

この「nick wilder」は追方が実際に作ったものとして展示するため、かなり薄めた絵の具を何回も塗って色を淡くし、ブラシで顔の所々を磨き石膏（実際は石粉ねんど）の部分を見せたりすることによって、年代ものに見せる工夫をした。

実際に自分たちでアプロプリエーションを用いて作品を製作しながら、最初はただ作品を真似ている、複製の作品を作っているという気持ちであったが、作業を進めていくうちに自然と作品に愛着も湧いていき、最終的には作った人の色々な想いが込められた、"オリジナ

Hosei University Repository

ル"の作品として完成したように思う。今回の展覧会も最初はただの空想の話であったが、作品の作業が進んでいくにつれ、架空のアーティストの作品ではあるものの現実にある作品として、存在を確立していき、やがて追方夏生の回顧展という稲垣ゼミの作品として完成した。

人々のもの、作品の価値の見方は「有名な人が作ったから、見栄えがよさそうだから素晴らしい」、「これは真似してるから、人気がないから良くない」など表面的な作品の情報でしか見ていないことが多いように感じる。しかし今回は何も価値のなかったものから価値を見出し、作り出せたことによって、ものの価値を情報などに惑わされず、自分たちで考え、判断する力を身につけることができたと考える。

「原発について学ぼう～事故が起きたらどうなるの？～」

原子力発電所の安全性についてメディアは正しく伝えているのか、という訴えから作り上げられた作品である。原子力発電所に着目した理由は、「茨城県東海村放射能漏れ事件」が1994年から2003年の間に起きた社会の出来事の中で、私たちが設定した追方の人物像からして一番彼が食いつきそうな出来事であったからである。高校時代に彼がバンドをやっていたという設定から、彼が忌野清志郎ファンという設定を作り出した。そして忌野氏の曲に原発に関する曲があるので、それを追方がこの作品を作るに至った経緯として結びつけた。

作品形態をワークショップで参加型のものにした理由は学会当日に来場者に視覚だけでなく実際に参加して楽しんでもらいたいと思ったからであるが、結果的にこの作品はワークショップ後の完成した状態で展示することになった。

作る過程で意識したことは参加者が参加しやすいようなワークショップを想定して作るということである。実際は人々に参加してもらったわけではないが私たちが作り上げたものなので、参加型の作品

Hosei University Repository

らしさが損なわれないよう意識した。また展示方法も、いかに視覚的に楽しませるかということを意識し、天井から作品を吊り下げることによって来場者の目を引くようにした。

作品自体は架空のものだが、「茨城県東海村放射能漏れ事件」や忌野氏の「サマータイムブルース」の発売中止は実際に起こっている出来事である。作品を作るために当時の社会事情などを調べていくうちに、私たち自身がメディアのあるべき姿を考えながら作品を作るようになった。このことが追方をよりリアルに感じさせる要因となったのではないだろうか。

「無題」

「無題」という作品を作るにあたって、これが追方の晩年にあたる40～45歳に作成された「遺作」であるという観点から構想を練った。この作品もまた追方のこれまでの人生における人間性や作風を鑑み、同時期に現実の社会で起こった出来事を絡めることで架空の作品のリアリティを強めることを目指した。その結果、いくつかのキーワードが浮かび上がった。それは、「インスタレーション」、「たばこ」、そして「人権」である。

まず、作品形態を決める際にインスタレーションを選んだ理由は、展示会全体としてのバランスをとるため様々な手法で表現された作品があったほうが良いと考えたからだ。他の年代の作品と並べたときに、バリエーションを豊富にすることで来場者を飽きさせない工夫をした。また彼は30代にインスタレーションやワークショップを盛んに行ったという設定があるため、彼の代表的な表現手法のひとつとして晩年も取り組んだという流れは自然だとも考えた。

次にインスタレーションに「たばこ」を使った経緯の発端には2007年に東京都内タクシー車内全面禁煙が始まったという事実があ

Hosei University Repository

る。追方の晩年にあたる 2004 年～ 2009 年の出来事の中で、作品に絡めていくものの候補になったのは中越地震や裁判員制度などいくつかあった。これらの出来事の中から、追方氏がヘビースモーカーであり肺がん患者であったこととのつながりから、「たばこ」に関する作品・「たばこ」を使った作品を考えた。

そして、このインスタレーションのテーマを「人権」にしたことにも、追方が喫煙者であったという設定は重要だった。タクシーの車内が禁煙になることで、たばこを吸わない人が快適に過ごす権利は守られるが、喫煙者の権利は侵される。このように、「誰かを守る人権が誰かを傷つけることがある」、「片側から見ただけではその本質はわからない」ということを来場者に考えてもらうためのきっかけとして、たばこを例に出すことで理解してもらいやすくなったと考えている。

以上のような作品を展示し、学会当日は思った以上にたくさんの方にお越しいただいた。回顧展の最後に映像作品という形で観ていただいた種明かしまで多くの方に追方夏生は実在の人物であると信じられていたのではないだろうか。架空のアーティストによる嘘の展覧会ではあったけれど、その空間には追方は確かに実在していた。我々が追方を通して伝えたかったことが来場者に少しでも伝わっていたのなら幸いである。